

平安初期に於ける北関東常陸の佛教

坪 井 俊 映

往古北関東常陸は東海道の終点であつて、金玉尊中抄律令部第二^①には、遠流の地とされ、平安時代に数多くの人が遠流の刑に處せられた処である。この地方に於ける仏教の伝来は同國根本寺縁起^②によると推古天皇の御世高麗僧慧慈がこの地に來つたことを録しているが、これは史実として疑ひなく、この地に來りて仏教の弘通につとめた著名な人としては先づ法相宗徳一が挙げられる。

徳一は得澄とも書かれ伝^③によると、興福寺修四僧都について法相を受し、嘗つて法華新疏を作り伝教の説を難破したのである。彼の法華新疏の説が如何なるものであつたかは明らかでないが、その後「朝議に忤つたため東土に謫遷として流罪になつた」と記しているが、元享釈書第三、東國高僧伝第六等には、「常州扶波山寺を南き門紫益茂る」と記して配流について何等記述する所を見ないのである。徳一が本朝高僧伝に記述する如く、はたして常陸へ遠流されたかは疑問の存する所で、配流のことを記するのはこの本朝高僧伝のみで、それ以外の諸伝には見る事が出来ず、加之平弘法大師御伝卷上^④にある空海の徳一に宛たる書状には徳一を

以て「菩薩」と呼び、「錫を振つて東征し、始めて法幢を建て衆生に耳目を示す」と人と尊崇し、経範の集記せる大師行狀記には、「彼國自存聖人多名德一菩薩」と記している所より考うるに、彼は流罪になつたのではなくして、彼の鑑真の高弟道忠が上野下野に法雷を振いし如く、南部にて彼の意見がいれられなかつたため東國の地に下向して、教化の網を布いたのであらう。

彼の下向の年代については諸傳にその記述を見ないのであるが、南部高僧傳には「天長元年七月廿七日自惠日寺下着常陸國年七十六」とありて、会津惠日寺より淳和天皇天長元年（AD 八二四）に常陸元米に依であつて、時に年七十六の老齡であつたと言ふ。弘法大師御伝巻上に載す「送德一菩薩一通」なる書狀には、「陸州總一菩薩 法前 謹空」とあり、大師行狀記陸奥國惠日寺條には、「號名德一菩薩大師此菩薩付嘱此寺（惠日寺）大師歸洛」とありて、彼は陸奥會津に相当永く居つた依であり、會津風土記^④、新編會津風土記によると弘法大師空海は大同二年（AD 八〇七）この地に來り、惠日寺に住すること三年、弘仁元年（AD 八一〇）德一（得益）にこの寺を附嘱して飯治すと言ふ。さればこの記事より考うるに德一は天長元年常陸へ來る以前十数年間會津の地にありて教化に従事していた依である。而して傳には惠日寺にて終ると言ふからして、彼は相い隣する會津常陸の間を往復して教法の宣揚につとめたとすべきであらう。

尙前編風土記^⑦には群馬郡佐島村西光寺は弘仁年中（八一〇—八二三）德一の建立する所と言ひ、「寺中設香香日神社為鎮守祭礼因南部興福寺々例矣」とあり、彼は大同、弘仁天長年間に渡りて会常兩國に渡りて活潑したことが伺はれる。然し彼が常陸にて活動した中心は筑波山であつて、地名大辭典（三五八九）筑波中禪寺の項には本誓路圓会の文を引いて、「筑波山は桓

武命の時、徳溢大士の登山して伊弉諾伊弉册二柱の神を勧請し、……鎮座せしめたまう、即ち神田三千町喜捨あり、それより以来の靈場となす」と言い、筑波名跡志には、「半復の仏僧傳方寸延暦年中徳溢上人の南基、其後大同年間空海大師結帙して密教弘通の道場となし給う」と言う。高僧傳等の仏傳には筑波山に於ける彼の興法について、その文簡略にして「筑波山寺を南基門葉茂る」とのみ記して、具體的な彼の活動は記述してないが、地名入辞典に明す所より考ふるに、神社信仰と並び仏の教法の宣揚につとめた所である。彼の教化がいかに大なる足跡を残したかは、同辞典の筑波神社の項を見るに、「延喜式に筑波神社二座とあるは即ち双峰各別の祠のあるにあられ、半腹なる神宇は元中禪寺の南基橋一法師の祭れるものなりべし」と記する如く、後人が神宇を立て、徳一を祭る程の大なる感化をこの東土の僻地に残したのである。

更に会津の慧日寺は彼の終焉の地であるが、新編会津風土記には、「徳一當時に住せしより以未相統して寺門繁栄し、子院も三千八百坊に及ぶ」と言う。子院三千八百坊と云うは少し誇張した表現であるが、この地に於ても大なる足跡を残した所であつて、彼の慈覺大師の資望が承和十一年（八四四）羽州講師として東國に赴きし時「管内皆學唯識不知天台」と記して、當時法相を受する人の多かつたことを述べているが、これは徳一の遊化の而らしむる所と考えられる。

徳一の南陸に於ける教化が春日神社の奉斎諸冊二冊の奉記をもつた如く、これに南連して考へられることは、鹿島神宮寺の建立である。鹿島神宮寺は三代史録によると孝謙天皇天平勝宝元年（AD. 七四九）信満頼と神宮宮司鹿島大連大原、大領中臣連千徳とが議して建立した

ものと言う。この建立の理由について類聚三代格に、「當時諸名族皆有氏神祠以祀其祖及佛法之盛又運堂奉仏謂之氏寺以宗人爲俗別當檢領寺務」とありて、氏族の祀る氏神に對して氏寺として建立されたものがこの神宮寺である。同記には「自是神宮寺漸遍於天下」と記し、滿額はまた諸國を廻國し、猶根、桑名、伊勢等に神宮寺を建立した力である。日本紀には神宮寺の最初は鹿島神宮寺であると述べている。この鹿島神宮寺のある常陸の地は古くから開けていた地方であるが、氏神を祀る神宮に對して氏寺神宮寺を建立したこと、氏族の勢力の強ひ東土の地に仏教の弘通に大きな一石を投じたものと云えよう。この神宮寺は仁明天皇承和四年（八三七）定額寺と可り、清和天皇貞觀十七年（八七五）には伽藍修復のため寺領を賜つてゐるのである。

更に平安初期この地方で活躍した人として嚴仙がある。嚴仙は常州の講師となり、戒行並び勝れた人で、寺院堂宇を修繕し、又道路を修理し橋を架け、疾餓の人を助け、時人より悲愴大士と尊ばれたのである。本朝高僧伝六四によると、延應元年西運寺を行方郡に建つと言う。西運寺は現在常陸高野と云れる、地方の名刹で、西運寺の過去帳によると彼は弘仁十年七月二十四日（八一九）寂したことになつてゐる。従つて徳一とほぼ同時代の人であることを知る。かくの如く法相宗徳一、滿額、嚴仙等に依りて平安初期この地には仏教盛えにが、その後兵乱等のため次第に衰え、鎌倉時代にならるまで著名な人師を見ないのである。

- (1) 金玉掌中抄律令部第二（群類七九六）に近流付越前、安藝、中流付信濃、伊豫、遠流付佐渡、隱岐、伊豆、安房、土佐、常陸とす。
- (2) 地名大辞典、（三六五三頁）
- (3) 本朝高僧伝五、（仏全一〇九）、東國高僧伝六、（仏全七四）、元享釈書二（仏全八三）、南都高僧伝（仏全五一九）
- (4) 続群書類従八下、（五三七頁）
- (5) 続群書類従八下、（五一四頁）
- (6) 石寺類苑宗教四、（七四五頁）
- (7) 続々群書類従八、（八七九頁）
- (8) 地名大辞典、（三七七八頁）にすると大同年中徳一行藥師如來を八莖寂に安置し、石城郡粟王寺を所くと云う。
- (9) 元享釈書二、安藝伝（仏全一六四頁）
- (10) 元享釈書一四、（仏全三〇〇）、東國高僧伝二（仏全二二）